



水郷柳川のかきつばた

## 男声合唱組曲「柳河風俗詩」

お客さん、柳河は初めてとね？鉄道駅からはこげんして乗合馬車に乗ってもらわんといけんよ。不便をかけますな。なんしろ、頭の古かもんばっかりやけん、鉄道を通すちゅうたら反対

ば、しよりましてなあ、駅ははるか遠くになったけん、あたしゃ一日何度も、喇叭鳴らして馬車を往復させとるとよ。

そろそろ夕陽がかたぶくっちゃね、ほれ見えてきましたばい。あの大きな鳥居。柳河の目印みたいなもんたい。ここのお社は三柱神社ちゅうて、昔の領主様のご一族三人が祀られとるげな。鳥居は赤がねが葺かれとるけん、地元では「かねの鳥居」ちゅうとります。さて、これをくぐると二ツ川、この川がお社の神域との結界になつとるばい。川にかかる橋が「欄干橋」、これもここの呼び名たい。

もうし もうし柳河じゃ 柳河じゃ  
銅（かね）の鳥居を見やしゃんせ  
欄干橋を見やしゃんせ



かねの鳥居と欄干橋

橋のたもとに、ほれ、あの三階建ての建物。あれが昔の遊郭ですたい。なにも神社の真ん前に建てんでもよかと思うがばってん、昔からお参りのあとは精進落とかゆうて遊興にふけるのが慣わしやっただげな。よその街でも大きな神社と花街とは隣り合わせのところが多いと聞いとりますけん。

蕪の生えた その家は  
奮いむかしの遊女屋（ノスカイ屋）  
人も住まわぬ遊女屋（ノスカイ屋）

白秋は柳河のこと、すっかり廃れ果てた街ちゅうてます。ノスカイ屋はその象徴ですたい。そしてもうひとつの象徴が隣のまま娘。白秋の作り出した人物げな。亡き母の形見のてまりに赤い糸を巻いている。その影が水面に映っていかにも寂しげばい。

裏のBANKOに居る人は…  
あれは隣の継娘  
水に映ったそのかけが  
母の形見の小手毬を  
赤い毛糸でくくるのぢゃ  
涙片手にくくるのぢゃ



京都の町家の床几（バンコ）

は？白秋のこと、なしてそげんよう知っとうかて？そらそうさ。あたしゃ白秋の子ども時代の記憶の中に生きとるとよ。いわば白秋の分身ちゅうてもええかも知れん。そもそも『柳河風俗詩』自体が現実の描写やなくて、思い出の中から紡ぎ出した詩作やけんね。

お客さんさえよけりゃ、今から白秋の記憶の中の柳河を案内させてもらうが、どげんね。

（馭者は喇叭の音をたてて  
赤い夕日の街に入る）

柳河の街は二つの顔があると。お城を中心とした武家の住む堀の内と、漁師や農民の生活圏の沖ノ端に分かれると。白秋の生まれ育ったのは沖ノ端。じゃけん『柳河風俗詩』のほとんどはこっちが表舞台ばい。なかでも「紺屋のおろく」は良く知られとると。江戸のころに阿波の国からここへ藍染めが伝わったげな。その紺屋の娘おろくが荒くれ漁師の界限を闊歩しとる。それを眺めて、苦々しく思うたばってんが、着ている物から藍に染まった指先までしげしげ観察しよるのを見ると、言葉とは裏腹の憧れもあったっちゃろう。白秋は酒屋のぼんぼん。向こうはやり手の姉御肌。相手にされない悔しさで、つい憎まれ口を叩いたっちゃろうね。

にくいあん畜生は紺屋のおろく  
猫を抱えて夕日の浜を  
知らぬ顔してしゃなしゃなど

にくいあん畜生は筑前しぼり  
華奢な指さき濃青に染めて  
金の指輪もちらちらと

沖ノ端は有明海に面した漁村。潮の干満が激しい海やけん、干潮ともなれば底なし沼のような泥の潟が広がるとよ。うっかり足をとられたらそらあ、どえらいことになる。あるとき、白秋たち悪童どもは潟に野良猫を投げ込んだとよ。案の定、猫はお陀仏たい。悪童なりに心にちくりと痛みを覚えたっちゃろうか。それがちょうど今みたいに夕日が赤い時分。おろくの飼ひ猫と、赤い夕日でそげな記憶がふっと蘇ったばい。

にくいあん畜生と 抱えた猫と  
赤い入日にふとつまされて  
潟に陥って死ねばよい (ホンニ ホンニ…)

柳河といえば、お客さん、水郷を期待しとっちゃろ。だったらちょっと堀の内まで戻ってそんな風情を感じてみんね。もともとは川の水を引いてお城の堀をめぐらしたのが始まりでな。昔から舟遊びはもちろんばってんが、神社の祭礼にも使われてくさ。掘割が暮らしの中に生きとったとよ。季節になれば水辺の「かきつばた」も咲いてくさ、そらあ綺麗かもんたい。水鳥も沢山来よる。陽が落ちるとお座敷の灯りが映り、三味の音が水面にしみじみ流れよる。白秋はそれらを全部集めて一つの思い出に編みなおしたとよ。これぞ水郷柳河たいって。

柳河の古きながれのかきつばた  
昼はONGOの手にかをり  
夜は萎れて  
三味線の  
細い吐息に泣きあかす  
(鳩のあたまたに火ん点いた  
潜んだと思うたらちい消えた)



筑前しぼり：博多の織物。超高価ではないが決して粗末ではない。金の指輪や博多帯も併せて「おろく」は使用人ではなく家業を手伝う紺屋の娘と知れる。



有明海の干潟

ONGO：良家の子女



鳩（けえつぐり）：カイツブリ「にお」とも呼ばれている。

## Stage 1 男声合唱組曲「柳河風俗詩」



足踏み式の水車

何にも娯楽の無か時代じゃけん、沖ノ端に旅芝居の触れが回ると白秋たち子どもにはそれはもう、楽しみで。芝居小屋もあるにはあったばってんが、だいたいむしろ掛けのにわか舞台ばい。梅雨のころならネギやニラは収穫後やけん、畑は平土間にはちょうどええ。ばってん、大雨でも降ればもう大変たい。水が溜まって大騒ぎたい。ばってん、そこは水郷柳河、よかもんがあるとよ。丸太を三本組んでこしらえる水車を使って水汲みたい。今日の外題は『義経千本桜』やけん、「梅雨の晴れ間」に忠信役が舞台化粧のまま水車で水のかきだしもすると。その姿がまるで狐六法みたいだと。そりゃそうさ。忠信は狐が化けとうけんね。なんともものどかな田舎芝居の楽屋裏ですたい。

廻せ 廻せ 水ぐるま  
はやも昼から忠信が  
紅隈とった シャツ面に  
足どりかろく 手もかろく  
狐六法踏みゆかむ  
花道の下 水ぐるま…

詩集「思ひ出」を出したのは、実家の破産が引き金やったことはその序文にも書かれとるでな。もう帰るところが無くなったという失意から、自分の中に思い出としての「柳河」を再構築したっちゃろうね。ようやく白秋が帰郷したのは死の一年前やったげな。は？そのとき顔を合したかと聞いとっと？それは無理というもんたい。あたしゃ思い出の中のいち風景。ご本人に会えるわけなかとよ。

じゃあ、お客さん、あたしはこれで。また喇叭の音を立てて夕日の街を出ていくけんね。

(参考資料)

『北原白秋 その青春と風土』 松永伍一 NHKブックス 1981年  
『白秋望景』 川本三郎 新書館 2012年  
『北原白秋 言葉の魔術師』 今野真二 岩波新書 2017年  
『白秋愛唱歌集』 藤田圭雄編 岩波文庫緑48-3  
『北原白秋詩集』 岩波文庫 2007年  
福岡ことば監修：河野 浩



北原白秋生家・記念館。(柳川市)

## Stage 2



# Buon Appetito!(どうぞ美味しく召しあがれ) カンツオーネ・アラカルト

いらっしゃいませ。ようこそ。どうぞ、窓辺のお席へ。当店、このあたりでは老舗のレストランで知られております。

さて、早速でございますが、本日はコースになさいますか、それともアラカルトで？ はい、はい、かしこまりました。コースは半ばお仕着せでございますが、アラカルトならお客様の個性が出ますので、お口の肥えた方はみなさんそのようになさいます。

では最初のアンティ・パストはもうお決まりで？ あ、やっぱり「ヴォラーレ」でございますね。50年代を代表するカンツオーネ、歌でも料理でもまずは基本からと申しますから、さすがのチョイスでございます。君の青い瞳に見つめられ、天にも昇る心地とはまさにこのこと。広い青空を独り占め、そんなクールな一皿でございます。



さて次はパスタをご用意いたしますが、なるほど、「マンマ」ですか。まさにカンツオーネの古典も古典。パスタは最もオーセンティックなソースで召し上がるのが一番。さすが通でいらっしやる。イタリア男はマザコンが多いとか悪口も叩かれますが、もしここが砲弾飛び交う戦場だったなら、誰でも母を想うのは当たり前じゃないでしょうか。現に、第2次大戦イタリア軍の前線ではこれが一番人気でございました。

メインのお料理の前に、お口直しはいかががでしょうか。ははあ、「砂に消えた涙」、さすがお眼が高い。イタリア男は口上手、うっかりその言葉を真に受けると後で砂に穴でも掘って埋める羽目になりますのでね。どうぞご注意を。でもイタリアを旅するとだれでも恋をしたくなりますから、あまり深刻になることもございませんよ。なにしろこれはお口直しですから。



次にメインのお料理にはお魚がまずお勧めでございます。ローマはテヴェレ川のこちら側に魚料理で有名なお店がひしめいておりますが、当店も決してひけはとりませんので。ああ、やっぱり「アリバデルチ・ローマ」をお選びで。あの有名な「ローマの休日」の二匹目のドジョウを狙ったローマが舞台の映画の主題歌でした。魚料理といってもドジョウじゃイタリアンになりません。案の定、映画は忘れられましたが、この歌だけはいまでもこうしてグルメのお客様にご注文いただいております。

そういたしますと、メインの2皿目はお肉でございますね。さすがに健啖でいらっしやる。かしこまりました。63年サンレモで優勝した「愛の別れ」、いかにも60年代のカンツオーネらしい一品をお選びで。愛しているのに別れましよう、大人の別離というのは複雑、といいますか、奥の深いソースで召し上がるのが相応しいようでございます。

さてこの次はデザートになりますが、あなるほど、甘いドルチェではなく、フルーツをお好みで？ 日本の懐石ではフルーツを水菓子と申しますから、水にちなんで「雨」などいかがでしょう。北イタリアの雨の日は、昼でも暗い空になりますが、あなたがいれば傘なんか要らない、心はいつも青空よ、という歌で、きっとハッピーな気分になっていただけます。今宵のお食事の締めにはピッタリでございます。

さあ、いかがでございましたでしょうか。ご満足いただけましたか。これを機会にまたこちらへお越しの節にはどうぞご最良に。はいはい、お勘定でございますね。ありがとうございます。お支払いはキャッシュで？ ええ、もちろん結構でございますよ。は？何ですと？ 歌を聴いただけだし、支払いも財布の音じゃらじゃらでいいだろう…って、お客様、それもキャッシュというんですか？ 勘弁してください。うちはやなぎ屋じゃないんですから。



## 神戸男声合唱団 ファミリーコンサート2024



コロナ禍でしばらく途絶えていたのですが、昨年暮れに久しぶりの団内ファミリーコンサート（略称ファミコン）が行われしました。独唱あり、楽器デュオあり、おやじバンドあり、和楽器あり、詩吟もありと、

ヴァラエティに富んだステージ、団員の隠れたる技能才能が次々と披露されました。これは団員・家族に留めていてはもったいない、定期演奏会にお運びのお客様にもぜひお披露目したいとの思いから、本日第2ステージで、ファミコン成果のほんの一端をご披露いたします。

フルート： 一ノ瀬 正  
クラリネット：高鍋 学  
サクソ： 堤 一夫  
ヴェノーヴァ：奥田多津雄  
テノール： 山本 徹・万波一朗・渡邊真康



## Stage 3



(注1) ジョーゼフ・ジョルダニア「人間はなぜ歌うのか」～人類の進化における「歌の起源」～  
アルク出版企画 2017年

(注2) 朝日新聞コラム  
2023年7月12日掲載  
「くちびるに歌を」 信長貴富



# 人は、なぜ歌うのか 信長貴富作品は語る

これはこれは、ようこそ。当合唱団に入団ご希望、もちろん大歓迎ですとも。でもよろしければ入団の動機をお聞かせいただけますか。ああ、なるほど。人はなぜ歌うのか、そのわけが知りたいと。奥深い疑問ですね。あのダーウィンも同じことを考えたそうですよ。そうそう進化論の。最近の学者の説(注1)では、我々の先祖が樹上から下りたときに、コワイ肉食獣を遠ざけるために大声で歌ったのがはじまりらしいです。それもユニゾンでなく、重唱の方が効果テキメンだったとか。ところが、たまたまうまくハモったりすると、なんだか気持ちがいい。ノリのいいリズムを混ぜてみるとますますご機嫌で、もやもやした気分もスッキリ。先祖も脳内で幸せホルモンが、ザーッと流れたんですね。それ以来、もともと護身用だった「歌」が幸せ作りのツールになったんだそうです。

加えて我々ホモ・サピエンスは次第に「言葉」というものを編み出した。もちろんコミュニケーションのためですよ。言葉で感情や考えを伝えることができ、それが我々種族の今日の繁栄につながったわけですが、この「言葉」を「歌」に乗せてみるとこれがますます具合がいい。知性は左脳、情緒は右脳、ってよく言うでしょう。「言葉」と「音楽」で左脳と右脳の相互交流が盛んになって脳全体が活性化するらしいですよ。幸せホルモンは健康にもいい、脳の老化を防ぐ。しかも歌った後はビールも旨い。ええ、当団はそのあたりも盛んですよ。(笑)

実は、人気の作曲家、信長貴富さんも、人はなぜ歌うのかを作品を通して問い続けているんです。(注2)たとえば『こころようたえ』。作詩の一倉宏さんはもともと広告会社のコピーライター。ヒットCMがいっぱいあります。でもコピーライターというのは、受注仕事ですからね、自分から書こうと思って書くんじゃない。ときには本当の自分を押し込めることもある。でも詩人であれば自らの心が歌える。これって「歌」の誘因としてすんなり納得できますよね。

だから心よ せめて歌え  
思いっきり哀しく思いっきり切なく  
そして思いっきり肯定的な歌を聴きたい  
だから心よ あなたは歌え  
いのち尽きるまで 歌え

『さらに高い道』の詩人、木島始さんの思春期は戦争に翻弄された時代でした。終戦後は東大に進み、英米文学者になった。在学中は学生運動にも関わった社会派なのに、後に子どもの絵本作家ともなった。それは戦争で子供を不幸に陥れる愚かな大人ではなく、純真な子どもの目線で世界を見ようと努めたからなのでしょう。この歌は、空高く舞う鳥のように、心の自由を得て人がさらなる高みへ

他の参考資料

「『音楽する』は脳に効く」 重野知央編 GAKKEN 2022年  
「幸福感の法則」 山口創 さくら舎 2024年  
「歌うネアンデルタール」 スティーヴン・ミズン 早川書房 2006年  
「ヒトはなぜ歌うのか」 BS番組「フロンティア」 NHKオンデマンド

昇ろうとする願望を、作曲者が詩人の言葉を借りて再構成した、実は信長さんの心の歌でもあるんです。(注3)

鳥は ゆく  
鳥は ゆく  
鳥は ゆく  
とべる 自由な  
つばさが ころろ

谷川俊太郎さんをご存知ですよ。昭和を代表する詩人です。子どものための詩や絵本をたくさん書いた。子どもの時は誰にも憚らずに大きな声で歌えるのに、大人になるにつれそれができなくなる。大声を出すのは無作法だから？音痴だと笑われるから？そんなことは気にしなくてもいいんだよ。歌を歌えば友だちができる。人間どうしの絆が生まれる。谷川さんは『きみ歌えよ』でそう言っています。まさに原始社会から続く道理ですよ。

きみ歌えよ  
嬉しいこと 好きなこと  
ひとりで歌えよ  
バカも卑怯もまるだしで  
歌えば 歌えば 歌えば ああ  
ベートーベンも友だちさ

『夜明けから日暮れまで』の詩人、和合亮一さんは福島県立高校の教諭としてあの震災に遭って、その日から詩は祈りとなりました。東北地方では新しい一日は東の海からやってきます。多くの魂が眠るその海に向かって詩人は「鎮魂と再生」を祈りました。そして祈りは信長さんの手で「歌」になりました。考えてみれば、西洋音楽の「歌」は祈りから始まったんでしたね。いや、もっともっと昔から「歌」は祈りの発露だったはずですよ。

わたし  
わたしは誰  
わたしは  
日付変更線の先の  
明日です  
夜明けです

遠い先祖が木から下りたときから続いてきた「歌」は、こうして様々な願いとなって私たちに受継がれているんですね。人は、なぜ歌うのか。答えはどうやらひとつではないようですよ。ですからどうぞ入団なさって、毎週金曜日、その答えをひとつずつ探っていかれてはいかがですか。ああそれと、月会費は入団月免除ですし、金曜日の練習アフタードリンクは初回無料ですから。



(注3) 「さらに高い道」と題する四行詩に、同じ詩人の童話集「飛ぶ声をおぼえる」から抜き出した詩を作曲者が組み合わせて構成した。



## Stage 4

# 30年目の祈り。約束。 その歌を。神戸から。

「ぼく」は雪村いづみさんが歌った『約束』でこの世に生まれました。それはかれこれ**60**年前。東京オリンピックが開催され、カラーテレビが普及し、新幹線が走り、高速道路が通りました。もはや戦後ではない、とそんな言葉も聞かれました。

でも一方では新聞の一面にベトナム戦争の記事が載らない日はありません。アメリカ国内はもちろん、世界各地で若者たちが反戦の声をあげていました。「ぼく」が生まれたのもそうした流れの中だったように思います。「ぼく」は病気や戦争で大切な人を失った世界中の子どもたちの化身なのです。今年がベトナム戦争終結**50**年、日本にとっても戦後**80**年の節目。でも「ぼく」のような子どもが世界からなくなるどころか、ますます増える現実心痛みます。

大切な人を失うのは、戦争だけではありません。ちょうど**40**年前に起こった航空機事故でも多くの命が失われました。ちょうどお盆休みの直前、帰省する人、出張帰りの企業人で客室は満席でした。搭乗者名簿の中には坂本九さんの名前もありました。彼が歌った『上を向いて歩こう』は、戦後の日本をどれほど元気づけたことでしょうか。そして今も歌い継がれています。**30**年前、突然神戸を襲った阪神淡路大震災から立ち上がる人たちにも、この歌は大きな力をくれました。

戦後日本は都市の過密と地方の過疎が進みました。その落差が大きくなるにつれ、知らない街へ旅に出たいという思いが募ったのでしょうか。『遠くへ行きたい』を歌うジェリー藤尾さんの歌に乗せてロングランの旅番組が始まったのが、ちょうど大阪万博の年。奇しくも今年は大阪で万博が開かれ、あれから**55**年。その間、故郷を懐かしむ人、都会の息苦しさから逃れたい人、多くの人を旅に誘いました。そして今また、都市型災害を危惧して遠くへ移住する人が増えたのも、神戸の震災が苦い教訓になっているのかもしれない。

来年、東日本大震災から数えて**15**年になります。あの時も、人々のまなざしを夜空へといざなったのは『見上げてごらん夜の星を』でした。悲しさでうつむきがちなこうべを空へ向けると、失った大切な人からの励ましが届いてくる、そんな気がするのです。二人なら苦しくなんかないさ。このフレーズに力づけられたのは「ぼく」だけではないはず。



こうして振り返ると、今年はいろんな節目の年だったのですね。「ぼく」もこれまでずっと生きてきました。それはパパとの約束があったからです。何があっても「今」というときを大事すること。パパがそう願っていたと思うからです。『今、今、今、』はそんなパパとの約束をみごとに歌いあげています。誰でもみんな、「今」を生きています。今日も、明日も、その先も。辛いこと、悲しいことを乗り越えて、大切な人の遺した思いを心の中で育みながら、生きています。

神戸の震災から**30**年。激動の昭和も**100**年。今年、こうして祈りと約束を歌にして「ぼく」をステージに乗せてくださってとても嬉しいです。その神戸男声合唱団も、来年創設**60**周年を迎えます。来年はどんな「約束」をしてくれるのか、今からとても楽しみです。



## ナレーション 片山三喜子 (かたやまさきこ)



30年前のあの朝、尼崎で体感した衝撃は、まるで爆弾が落ちたかのような感じでした。停電し、電話も通じず、散乱した台所を前に立ち尽くしたのを鮮明に覚えています。放心状態のまま、近所の方の車に乗せてもらい関西テレビへ。アナウンサーとして、報道特番で避難所やライフラインの情報を伝えました。「どうか、必要な方に届きますように」一祈るような気持ちでした。

その後、お世話になっていた西宮に住むIさんの訃報を知った時は、愕然としました。Iさんの優しい笑顔は、今も心に深く刻まれています。

あの経験を通して、「伝える」とは、ただ情報を届けるだけでなく、根底にある“思い”が大切なことを学びました。その気づきは、その後の生き方にも大きな影響を与えました。

現在は、ポジティブ・コミュニケーションコーチとして活動し、自分自身や周りとの関係を育む言葉の力を伝えています。今回は、元上司からのお声がけでこの舞台に立たせていただきます。震災を経験した一人として、「思い」を言葉に託してお届けします。